

## 大塚恭男先生を悼んで 医史学と先生

酒井 シヅ

大塚恭雄先生は漢方の大家として社会的に高名で、その業績は広く知られ、すでに東洋医学界で多方面から追悼記事がでているため、ここでは医史学における先生のご活躍を偲んで、追悼のこぼとしたい。

先生と医史学との出会いはおそらくドイツ留学中にあっただろう。しかし、本格的に医史学をはじめられたのは、先生が、昭和41年(1966)にドイツ留学から帰られた翌年3月に東大を離れられて、自宅で御尊父の敬節先生を手伝い、比較的に自由な時間をもたれていたときであった。筆者が先生にお目にかかったのはその頃であった。昭和42年4月、順天堂大学の小川鼎三先生の研究室にはじめて出勤したとき、そこに小川先生を訪ねられた大塚先生がおられたのだった。

その頃、日本医史学会の会員数は200名余で、活動も停滞を極めて、医史学雑誌を定期的に出すことが出来ず、会員の半数が休眠会員であった。関西支部の中野操先生から、このままでは医史学会をつぶすと非難されていた。

しかし、此の時から小川先生の人柄を慕って寄ってきた二人に、大鳥蘭三郎先生が加わって、ささやかな研究会が毎週ひらかれた。その頃、大鳥先生が会員数が500人になれば医史学会も順調になるだろうといわれたことを思い出す。

昭和50年(1975)、小川先生の旧友で、東洋紡の谷口豊三郎氏の谷口財団による医史学の国際シンポジウムが始まり、世界各国から10人前後の学者を集めてシンポジウムを開いた。それは小川鼎三先生を座長に大塚先生が中心となって開かれ、その後、小川先生が亡くなられてから川喜田愛郎先生をトップに20年以上も開催された。大塚先生は世界の医史学会に顔であった。

先生との思い出で印象に残っているのは、



大塚恭雄先生

昭和48年に金原出版の訪中団のメンバーとなって一緒に訪中したときのことである。中国との国交が回復後、きわめて早い時期であったことから、日本からの訪中は珍しく、大塚先生は日本の漢方界のプリンスとして大いに歓迎された。眼を細め、にこにこされていた顔が思い出される。

先生はたくさんの方の随筆を残されたが、それが「医学史こぼれ話」(平成7)に一冊になっている。奥の深さに感嘆するばかりである。

先生が東洋医学、医史学をはじめられた頃は、まだ時代の光の当たらないところであった。だが、先生はその道を信じ、淡々と悠然と歩いてこられた。その結果、先生の歩かれた道は、先生を慕う同志によって踏み固められ、東洋医学は世界に広がり発展を遂げた。

人は棺の蓋が閉じられるとき、真価が現れるといわれるが、先生の御葬儀に参列して、その思いを強くしたのであった。ご冥福をお祈りします。